

# 循環起業——農村回復戦略——

## ●利益を得ることの意味

環境問題にかかわっていると、「自分たちはすばらしいことをやっている」「正義の味方」という自負心にあふれた人たちに会おうことが多い。

自負心は大事だが、そういう人たちが実際に問題を解決しているのか、といえばそうではないところが気になる。わたしの所属する環境科学部にも熱心な学生が多いが、そういう学生に限って「お金のためにやっているのではありません」と言い、「お金がない活動は継続しない」と、お金の話をするわたしに批判的なまなざしを向ける。

そういう学生に紹介するのが『福祉を変える経営』（日経BP社、二〇〇三年）である。著者の小倉昌男さんは「グロネコヤマト」の宅急便事業を育てたあとと引退し、ヤマト福祉財団をつくって活躍されている。

ほとんどの福祉作業所では、障害者には一万円以下の月給しか支払われていない。そういうなかで、小倉さんは障害者を中心にしたパンの店を実際に運営し、障害者に一〇万円の給料を払って、障害者の自立生活の可能性を提供している。

小倉さんの主催するセミナーでは、集まった福祉関係者に対して「すばらしいことをやっている、という意識を変えてください」というところからはじめる。

「みなさん方は障害者のために小規模作業所をつくり、献身的に仕事をしている。しかし、そこで働いている障害者は月に一万円以下しかもらっていません。逆に言うと、みなさんは一万円以下しか障害者に給料を払っていない。それでいいんですか。見方を変えたら『搾取だ』と言われてしまうのではないでしょうか」

これに対して、熱心な福祉関係者ほど反発する。自分たちは二〇年も三〇年も苦勞して福祉の仕事をやってきた。福祉の仕事は尊い。一方、企業はしよせん金儲けじゃないか。金儲けは汚いことだ、と。

これに対する小倉さんの答えが明快だ。

「金儲けはけっして汚いことじゃない。人のためになるサービス、人が欲しいモノ、そういうものを一生懸命努力して生み出し、手元に届ければ、お客さんがサービスを利用し、モノを買ってくれる。つまりお客さんのためにがんばったご褒美として収入が増える。これが金儲けの原則」

さて、農業や環境分野では、お客さんが喜んでくれる

ことを原則に動いているだろうか。

## ● 消火剤のリサイクル

いまわたしは福岡県椎田町で、消火剤の消火剤を肥料として売る準備をすすめている。

椎田町では尿尿を液肥として水田で利用しているが、尿尿にはリン酸が不足しているため、液肥を散布しても農家は追加してリン酸肥料だけ散布する必要があった。

液肥の中にリン酸を溶かしてやれば農家の手間が省けるのではないかと。でも、リン酸肥料を購入して液肥に溶かして散布するのは芸がない。どこかに捨てているようなリン酸はないだろうか。

と、数か月考えていたら、消火剤の消火剤の中にリン酸がたくさん入っている、という情報が入ってきた。消火剤の中にはリン酸以外にいろんな薬剤も入っていて、安全性の面から肥料としては使えないのではないかと、そんなものを農地には使えない！ という無責任で根拠のない外野からの声が聞こえてきたが、ひとまず消火剤メーカーに問い合わせることにした。知らないで議論するのは時間のむだだし、聞くのはタダだ。

なんと、消火剤の薬剤は、農家が散布している肥料そのものの燐安だ。

ここから話の展開は早かった。

福岡県築上地域農業改良普及センターの安永さんがインターネットで検索して、消火剤を肥料登録している消火剤メーカーのモリタを探し当て担当者で連絡を取り、

一か月後には、椎田町役場で顔合わせとなった。そして、半年後には椎田町役場、モリタ、普及センター、長崎大学、佐賀大学で「消火剤リサイクル研究会」を立ち上げることになった。

消火剤の耐用年数はおよそ八年。つまり、八年すればほとんどの消火剤は使われないまま捨てられる。

消火剤販売会社は新しい消火剤を販売する際に、古い消火剤を回収する。消火剤の構造はシンプルで、容器はアルミと鉄、そしてゴムホース。薬剤が燐安。鉄とアルミは再生されるが、ゴム類、薬剤は、産業廃



写真右上 消火剤の中にリン酸肥料が入っているとは思わなかった。  
写真左上 消火剤の中に入っている消火剤。  
写真右下 消火剤は水に溶けないように加工されている。これは肥料として使うときの最初の課題。

棄物として処理されている。優れたリン酸肥料である薬剤は、汚泥扱いで産業廃棄物として埋め立て処分されている。消火薬剤量は年間二万t以上。

しかし、消火剤は消火の役割のため、製造段階において防湿・微粉加工がされていて、すぐに肥料に使おうとしても使いにくい。まずは、防湿加工をされているので、水には溶けにくい。消火器の中で固まってしまつては消火の役に立たないので、いつまでもサラサラの状態を保つために防湿加工をされている。また、消火剤が広く噴霧できるように、細かな粒にされている。風が吹けば飛んでいく。

実際、わたしの田んぼに消火剤を散布したが、水の上についてまでも浮いているし、細かな粉なので、風が吹くと水面上を移動する。肥料としては、もう少しの工夫が必要であった。

リン酸はすべて外国からの輸入であり、限られた資源だ。わざわざ処理費用までかけて埋め立て処分するというのは、もったいない話。うまく利用すればゴミが減り、リン酸が安く再利用できる。

## ● 循環起業

さて、理論的に肥料化が可能だからといって、それがすぐに循環するわけではない。利益が出るような事業にまでもつていく必要がある。循環は利益があがる事業だけが担えるからだ。

事業化の課題はいくつもある。まずは、本当に肥料と

して使えるのか。そこで、実際に尿尿液肥の中に溶かす実験から始まった。そして、農地に散布して作物の栽培である。これもめどがたった。

次に、防湿加工、微粉加工を壊して、すぐに水に溶ける粒状にして、一般のリン酸肥料と変わらない加工の方法も見つかった。

肥料としての販売は容易である。JAと協力して既存の肥料よりも安価に売れば、必ず売れる。そもそも原料は無料なので、安く売ることが可能。

いちばんの課題は、消火剤の回収である。これも現在、その手法を調査中で、めどがたってきた。

これで年内に事業計画をつくつて、数億円の加工機械の購入、工場の建設を行うだけである。いまからいろいろな省庁をまわつて、数億円の調達を交渉しようと思つている。

ゴミが減り、リサイクルになり、安い肥料を農家に提供できる。しかも、椎田町という農村に仕事をつくりだすことができる。五人は雇えるだろう。

いったん仕事として動きだせば、消火剤はゴミとして捨てられるのではなく、リサイクル利用されていく。事業が資源を循環する。そういう事業をつくりだす、「循環起業」である。

大儲けはできないだろうが、環境によくて、なにより農家に喜んでもらえる「いい仕事」と考えている。

九州では椎田町の一か所で十分だが、北海道、東北でも事業化は可能だ。関心のあるJAは取り組んではどうだろうか。

写真II 椎田町では尿尿液肥は畑にも使う。散布サービスマスまで込みなので、農家は言っている。



感想や意見は、下記まで。

osamu.nakamura@nifty.ne.jp  
http://homepage3.nifty.com/osamu-nakamura/index.htm